竹田組、一〇〇年の歩み

株式会社 平塚 竹田組

「帝都復興祭に就て」

昭和五年三月　社長　竹田源次郎　話

忘れることの出来ない大正12年9月1日の大震災から、はや8年になります。あの惨たんたる焼け野原の東京、回復の目当ての付かぬあの当時を追想いたしますと夢のようです。

大阪方面の意見として帝都移転説等称えられました時、東京市の前途はまるで闇黒で我々市民も物質的にも精神的にもまるで死んだようになって居りました時かしこくも摂政宮殿下より東京は永遠に日本国の帝都であり且つ此の帝都の復興に関し東京市民に種々と有難い御令旨を賜ったのであります。

あの当時を思い起こすと感慨無量です。この焼け野原を如何にして復興するか、骨を砂利にしてこの御令旨に添い報い奉らなければならぬと其れから勇気付いて復興事業関係の皆様と共々この八ヶ年は、只管帝都の復興に努力致して参りました。

我が竹田組は土木建築請負業としてこの復興の第一線に立って焼けた灰の中から仕事を始め今日この御目出度い復興祭の当日迄各種の工事に御用を務めさして頂いた事を光栄に思い尚一層御聖恩の高大を衷心より感謝致します次第で御座います。

私もあの9月4日只今の所に丸太の掘っ立て小屋を建てまして昨年9月この地区の区画整理の出来る迄、夏の暑い時はまるで蒸し風呂の中に入ったような苦しさも、冬は小屋裏や戸の隙間から入る風を新聞紙で防ぎながら満六ヶ年間の朝夕を送りました。然し復興事業は、組員諸君と共に刻苦勉励して事業を励み工事数にして300余件、請負金額にして約弐千五百余万円の仕事をあの「バラック」を本店として遂行致しました事は心から最も愉快に思います。

今日、復興事業が完成してこの御目出度い祭日に、陛下の行幸を仰いで天覧に供にするこの帝都の出来形を見て非常に深い感想に打たれます。斯の如き世界に類例なき大偉業の完成は空前にして恐らく絶後の事と存じます。

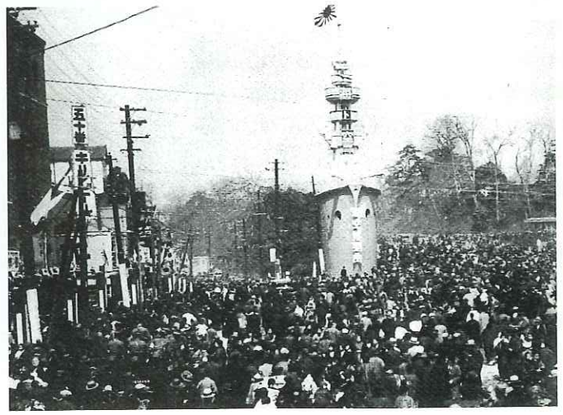
我が大和民族が宇宙に誇るべき大建設であると信じるのであります。この大事業を成功せしめたる原因は私が考えますには、

一、皇恩の盛大

二、日本国民の大覚悟

三、事業直接関係者の献身的努力

この三つの力が合成したものと存じます。我が竹田組も諸君と共々にこの大事業の一部完成に、携わりこの目出度い日に皆様と共々に悦び且つ御祝いをする事が出来るのは、常々私から皆様に申し上げてある通り何事にも「誠心」と「仕事に親切なれ」という組の精神の現れが御得意の認める処となって今日の盛況を見たのであります。



●昭和5年3月 復興祭当時の写真

復興事業も今回を以て略完成したのでありまして、これから我が土木建築業業界も平時の状態に返るのでありますから尚一層、誠心誠意真面目に御得意様に対しては親切第一とし、御注文者の意図に合致する完全なる仕事をなす様に、心掛けて参らなければなりません。お話しする事が前後して居りますが、一言帝都復興に付いて私の感想を申し上げる次第で御座います。

昭和五年三月

帝都復興記念錄

附 社員名簿

株式會社 竹田組

株式会社 竹田組職制

社長
- 第五部 — 庶務係、工務係
- 第四部 — 庶務係、工務係
- 第三部 — 庶務係、工務係
- 第二部 — 庶務係、工務係
- 第一部 — 庶務係、工務係
- 会計部 — 出納課
- 技術部 — 監査課
- 営業部 — 機械課、庶務課、工務課、営業課

●竹田組重役

取締役社長　竹田　源次郎
取締役　長谷川源次郎
同　横田　三吉
同　花井　敬三
同　深井　安藏
同　三ツ橋　清松
監査役　吉川　善三郎
同　竹田　春枝
技術部長　新海　榮一

●本社職員

社長　竹田　源次郎
常務取締役・営業部長　三ツ橋　清松
技術部長　新海　榮一
会計部長　椎津　其吉
工事主任　竹内　和吉
同　石原　恒太郎
同　黛　與米次
営業課　藤吉　茂久吉
庶務課　古賀　嘉太郎
機械課　黒江　景範
中津　隆三
牧野　吉三郎
鈴木　三朗
永田　文藏
佐生　武
菅井　三郎
刈込　角藏
伊藤　多喜之助
渡邊　光造
黛　恒平
堀川　彌吉
村山　眞次
張　仁　德
瀬下　家治郎
三ツ橋　竹三郎
中嶋　みや
立花　孝
矢澤　久

●第一部職員

専務取締役・第一部長　長谷川源次郎
工事主任　關根　金次郎
小林　隆二
朝倉　重治
安田　庄吉
佐藤　初太郎
齋藤　宗一
由井　武道
菅井　銀二
長谷川源之助
長谷川　正治
岩田　義則

●第二部職員

第二部副部長　大川　要
同　森野　政平
栗原　銀作
内藤　喜市
戸崎　竹二郎
宮崎　猶吉
平嶋　肇
前嶋　重美
小川　陸之助
關　辰雄
草薙　清
野口　達弘
森野　武雄
森兼　源一
寺内　得
伊坂　兵馬
森野　松雄

●第三部職員

常務取締役・第三部長　花井　敬三
工事主任　伊藤　寅吉
山田　喜代藏
綾井　幸三郎
堀　五郎
歌　行友
深代　文司郎
稲葉　泰次郎
山田　賢藏
山田　正之助
伊藤　武夫

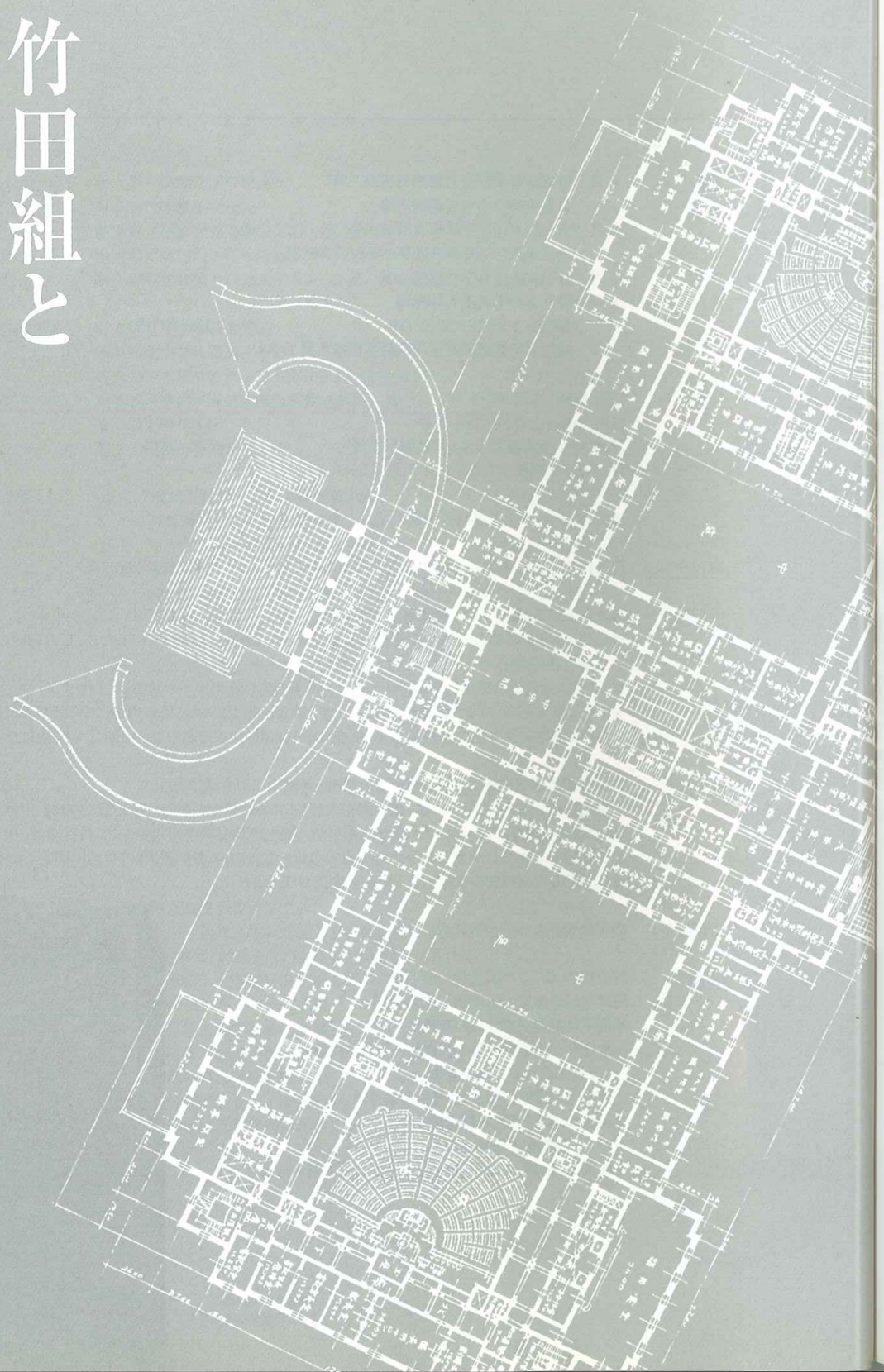
●第四部職員

常務取締役・第四部長　深井　安藏
工事主任　渡部　滿房
同　力石　林藏
竹内　善一郎
神奈川縣中郡平塚町（海軍火薬廠前竹田組出張所内）
臼井　新
池田　五郎三
前田　盈滋
深井　惣次郎
佐藤　寅市
川鍋　鼎三郎
濱田　棟一郎
瀬山　斧治
渡邊　德也
久村　久治

●第五部職員

第五部長　岩井　金三郎
工事主任　荒山　武治
鈴木　重信
渡邊　藏三
清水　鶴吉
伊木　林次
菊谷　勇一

竹田組と各省庁との繋がり



農商務省

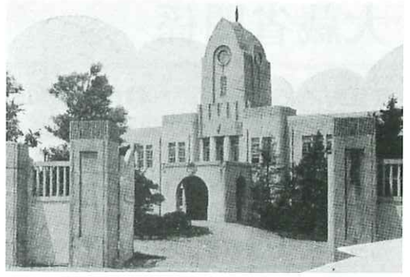
受注先／農商務省　**請負金額**／300,000円　**工期**／大正10年　**工事名称**／川口燃料研究所新築工事

この建物の外観図は、都市研究会発行の「街 明治大正昭和 関東」より見ることが出来ました。この本を神保町の古本屋を歩いていたときに、偶然に探し当てました。

当時、この研究所は農商務省の管轄で石炭、エネルギー等の研究をしていたそうです。大正9年8月に設立されて、後の昭和27年に燃料研究所と鉱業技術試験所が合併して、資源技術試験所を発足。更に、昭和45年7月に公害資源研究所と名称を変更、昭和55年3月につくば研究学園都市に移転、ここで名称を、通産省工業技術院公害資源研究所に変更し現在に至っているそうです。

何年に取り壊されたかは不明だが、国立燃料研究所跡地には、現在別の建物が建てられている。

当時の請負金額で30万円という額がどの程度のものなのか、わからないが大きな建物であったことは、間違いないと思う。上記の本に設計図が現存する旨が記載されているが、その所在を確認することが出来なかったのが残念である。（文：川之辺　潔）

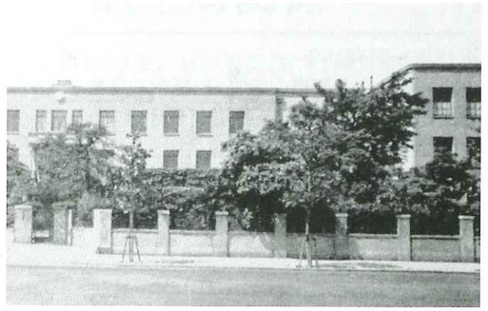


●旧農商務省の燃料研究所として建てられたこの特異な形をなす塔は、当時のドイツで流行した新しい建築の様式、ドイツ表現派の影響を受けたものと言われている。

海軍省関係

受注先／海軍省関係
請負金額／13,574,200円　**工期**／大正11年～昭和20年
工事名称／造兵廠格納庫・品川海軍・経理学校・霞ヶ浦飛行場兵舎並格納庫・平塚火薬廠・霞ヶ浦飛行場滑走路・本省並築地造兵廠・火薬廠研究場並火薬庫・霞ヶ浦航空隊講堂・霞ヶ浦航空隊発動機設備工場機体実習場・艦政本部製図工場・霞ヶ浦医療病院・霞ヶ浦修理工場並柔道剣道場・横須賀海仁会病院・横須賀海軍官舎・横臨乙艫住宅・海軍工廠新築・平塚海軍工廠新築・海軍中原工廠・艦政本部印刷工場

●海軍経理学校（品川）



●海軍省

大正8年（1919）に日本爆発物製造会社を海軍が買収し、海軍火薬廠と称した。世界有数のメッカとして昭和20年（1945）8月の終戦まで存在した。しかし、制度上は11月30日まで残務整理を行い廃庁となったといわれる。この間に火薬本廠、続いて第二火薬廠と称された。また火薬の生産は昭和19年頃年産七千瓩。

従業員は、徴用工員を含んで8,500名であったが、昭和20年7月16日の平塚空襲で壊滅的打撃を受け、当時の面影もないように変わった。戦後まもなく横浜ゴム・パイロット万年筆・農林省農業研究所等多数に分割され現在に至っている。

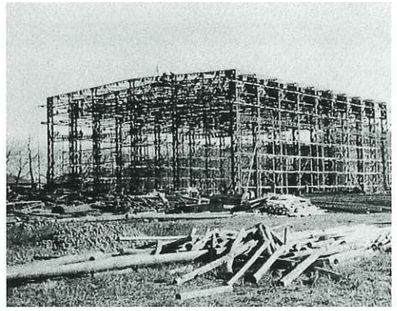
松竹株式会社

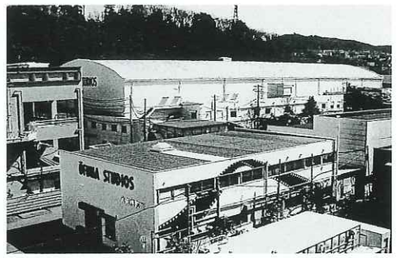
工事期間／昭和9年～昭和43年　　工事監督者／下島

規　　模／3万坪の敷地内に事務所・現像場・録音室・食堂・浴室・倉庫・工作場等合わせて49棟、建坪4,500坪。大船撮影所新設の建築費用は、1,282,850円（昭和9年～11年）と記録されている。（竹田組工事経歴書から）

松竹株式会社の施工実績

年	工事名称
昭和９年（1934）	大船撮影所新築工事
昭和15年（1940）	成子坂キネマ改修工事
昭和19年（1944）	大船特殊ステージ新築工事
昭和21年（1946）	大船撮影所復旧工事
昭和23年（2948）	日本館改修工事
	大船特殊ステージ新築工事
昭和24年（1949）	築地映画館改修工事
	東京倶楽部改修工事
	常磐座改修工事
昭和25年（1950）	大船撮影所第1ステージ改修工事
	大船撮影所第8ステージ改修工事
	大船撮影所社員寮宿舎改修工事
昭和26年（1951）	大船撮影所大道具倉庫新築工事
	大船撮影所道路舗装工事
	大船撮影所衣装倉庫新築工事
昭和27年（1952）	大船撮影所本館総務部新設工事
昭和28年（1953）	大船撮影所ステージ新築工事
昭和29年（1954）	大船撮影所ステージ改修工事
	月島フィルム倉庫新築工事


●特殊ステージ新築工事

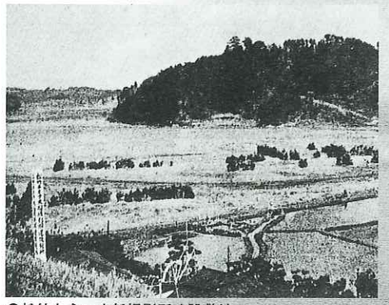


●松竹大船撮影所奥側建造物

●昭和30年代 松竹大船撮影所全景

年	工事名称
昭和30年(1955)	大船特殊ステージ新築工事
	大船撮影所ステージ換気装置改修
	大船撮影所第2ステージ改修工事
昭和31年(1956)	アフレコステージ新築工事
	大船撮影所道路舗装工事
昭和32年(1957)	新宿松竹座改修工事
	大船撮影所各所修繕工事
昭和33年(1958)	新宿松竹座改装工事
	新宿松竹座食堂改修工事
	大船撮影所各所修繕工事
昭和34年(1959)	大船撮影所特高受電室新築工事
昭和35年(1960)	堀内組武山セット工事
	月島フィルム倉庫増築工事
昭和36年(1962)	大船撮影所冷暖房室新築工事
昭和37年(1962)	大船撮影所各所修繕工事
昭和38年(1963)	築地中央劇場改造工事
昭和39年(1964)	大船撮影所各所修繕工事
昭和43年(1968)	大船撮影所テレビステジオ新築工事
	大船撮影所車庫新築工事

●松竹大船撮影所(1936年蒲田から移転)


●松竹キネマ大船撮影所建設敷地

●昭和11年1月16日
蒲田から自動車を
連ねて大船へ

●昭和11年1月16日　開所式の模様を撮影するスタッフ

●大船撮影所(左より、総務、本館、制作)

●開設当初の大船撮影所

●山門（三門）建立敷地造成工事

大本山總持寺

工事期間／昭和11年～昭和42年　　工事監督者／黛・宮沢・竹尾・関屋

大本山總持寺の弧峰智璨禅師様の紹介により、昭和12年に曹洞宗宗務院の新築工事を依頼されてから、当社の建築技術が住職の目にかない、以後沢山の仕事を戴くことになった。

大本山總持寺の施工実績

年	工事名称
昭和11年（1936）	天真閣新築工事
昭和32年（1957）	總持寺書院移築改修工事
昭和36年（1961）	大祖堂再建第一期土工事
	精舎幼児園新築工事
昭和38年（1963）	總持寺分譲アパート新築工事
	典座寮（白字館）新築工事
昭和42年（1963）	山門（三門）建立敷地造成工事

●昭和38年　總持寺分譲アパート新築工事

●昭和36年
大祖堂再建第一期土工事
昭和三十六年七月竹田組が第一期工事を請負い、敷地工事に着手し、一千余坪の敷地を約六尺程の深さに土を削り取り、その土は總持学園のグランドの高低地ならしに活用されて約五箇月に亘る敷地工事は同年十二月に完了した。

●昭和39年 典座寮（白字館）新築工事
典座寮とは台所のことで、毎日の食事をつくる所。白字館には他に250畳敷の食堂と大浴場がある。

●昭和32年　總持寺書院移築改修工事
待鳳館は、總持寺の迎賓館と呼ばれる建物です。最初の建築は大正4年に竣工しましたが、同12年（1923）の関東大震災で玄関だけを残して倒壊しました。現在の待鳳館は、昭和32年（1957）に東京・千駄ヶ谷の尾張徳川家旧書院を移築したものです。

●昭和42年　總持寺三門建立敷地基礎事業
鉄筋では日本一の門で、昭和44年に木原崇雲氏の一寄進で建立されたもの。なお三門楼上には、観音菩薩、四天王、十六羅漢が祀られている。

●昭和37年 精舎幼児園新築工事
本山社会事業部孤児養護施設「精舎幼児園」園舎及びホール落成。

●昭和37年 精舎幼児園新築工事

總持寺の成り立ち

日本曹洞宗大本山總持寺は、常済大師瑩山禅師の開創（一三二一年）にて、後醍醐天皇の尊崇をうけて“日域無双の禅苑、曹洞出世の道場”という論旨を賜わり一宗の大本山となりました。能登半島の門前町に在って、二祖大現宗猷国師峨山禅師が多くの門下を教育し、全国に一万五千の末寺をもつ本山の基礎を固めました。爾来五百七十年栄える法燈を嗣いで参りましたが、明治三十一年火災で三十余棟の伽藍を失ないました。

この時、一宗の熱望するところは新しい日本の中心地への進出であって、中興石川素童禅師の英断は遂に現在地の京浜間鶴見ヶ岡へ移転の大業をしとげました。そして昔日の堂塔伽藍を再建して三十余棟を造営しました。

十五万坪の境内に大小の甍が波打つ状態となり、最後に残された“大祖堂”と呼ぶ大本堂も完成されて、国際的な禅本山として伝道教化の活動いやます欣びを迎えました。

総門の三松関をくゞれば、左手の本山守護三宝荒神、大鐘楼あり、放生地を過ぎて勅使門の尊厳な檜皮葺の屋根が菊花御紋章の扉を覆うを見ます。総受付香積台の奥に日本一の大黒天尊を祀り、天真閣の大広間は団体参拝の食堂であり、大典座寮の炊事場も整いました。客室としては、徳川家ゆかりの待鳳館の家族室が備えられ、広間としては、紫雲台の金色燦然たる大襖や墨絵襖の各部屋があり、静寂な別天地の禅味をよろこばれています。

境内中央に佛殿、西に放光堂（位牌堂）僧堂、（雲水修行場）衆寮（一般参禅場）常照殿（納骨堂）が聳えています。そして東に、嶄然聳え立つ大祖堂が、千畳敷の広大な大本堂として完備された近代的建造物の機能を備えました。

開祖常済大師は当時大山名刹が女人禁制を立前としたのに対し、敢然平等を唱えて女人救済を唱導しました。よって大正年間の六百回誕記念として、女子教育の殿堂“總寺学園を創立しました。みるみるうちに、中学・高校・大学と発展し、生徒五千を数える佛教女子教育一貫する道場となりました。

●昭和39年　總持寺母子寮新築工事

同じく大慈悲の社会事業として、病院を工場地帯に設けて大綜合病院と発展したのを始め、母子寮も保育園も近代建築化するし、養護施設の精舎幼稚園は孤児園として日本一立派なものと称されています。

いずれも境内をめぐって、このような目覚ましい活動が、大きな意味の禅道布教の実績をあげていることは、全く他に見られぬ一大壮観であります。

歴史の古刹が往々にして大事な伝道のはたらきを中断して単なる観光施設化しつゝある現代に於て、内には古来の厳しい修行道場としての峻烈な実修を弛みなく継続して居るとともに、外にはその修行の全力をあげてあらゆる方面に布教伝道を展開してやまぬのが、大本山總持寺の在る所以であります。

總持寺 貫主

孤峰　智璨 禅師

岩本　勝俊 禅師

大雄山最乗寺

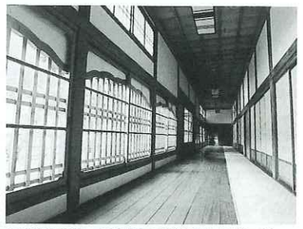
工事期間／昭和26年～昭和43年　工事監督者／田中　満

曹洞宗の名刹で、地元の人々から「関本の道了さん」として親しまれている大雄山最乗寺（所在地：南足柄市関本）は、曹洞宗大本山總持寺の直末で、応永元年（1394）に大森信濃守頼明が開基となり、了庵慧明禅師を開山として建立された、大本山永平寺や總持寺に次ぐ位をもつ寺である。

大雄山最乗寺に関する工事は、大本山總持寺の弧峰智璨禅師様により、特命にて工事の依頼をされる。大本山總持寺書院新築工事をはじめ開山堂新築工事・真如台三廉工事・信徒会館新築工事・真如台新築工事・光明亭工事・奥之院再建工事等々の建築に携わったことは、竹田組の大きな歴史であります。

大雄山最乗寺の施工実績

年	工事名称
昭和31年（1956）	大雄山最乗寺書院新築工事
昭和34年（1959）	大雄山最乗寺開山堂新築工事
昭和35年（1960）	信徒会館新築工事
	信如台他三廉工事
昭和37年（1962）	真如台新築工事
昭和41年（1966）	奥之院再建工事
昭和53年（1978）	大雄山最乗寺参道石垣工事



●昭和31年　大雄山最乗寺書院新築工事

●昭和31年　大雄山最乗寺書院新築工事

●昭和31年　大雄山最乗寺書院新築工事

●昭和35年　信如台他三廉工事

書院新築工事設計書

昭和三十年一月

大雄山最乗寺

●昭和35年 信徒会館新築工事

大雄山最乗寺は、曹洞宗に属し全国に四千余りの門流をもつ寺である。御本尊は釈迦牟尼仏、脇侍仏として文殊、普賢の両菩薩を奉安し、日夜国土安穏万民富楽を祈ると共に、真人打出の修行専門道場である。開創以来六百年の歴史をもつ関東の霊場として知られ、境内山林一三〇町歩、老杉茂り霊気は満山に漲り、堂塔は三十余棟に及ぶ。

開創の由来

開山了庵慧明禅師は、相模国大住郡糟谷の庄（現在伊勢原市）に生まれ、藤原姓である。長じて地頭の職に在ったが、戦国乱世の虚しさを感じ、鎌倉の不聞禅師に就て出家、能登總持寺の峨山禅師に参じ更に丹波（兵庫県三田市）永沢寺痛幻禅師の大法を相続した。その後永沢寺、近江總寧寺、越前龍泉寺、能登妙高庵寺、通幻禅師の後席すべてをうけて住持し、大本山總持寺に輪住する。五十才半ばにして相模国に帰り、曽我の里に竺土庵を結んだ。そのある日、一羽の大鷲が禅師の袈裟をつかんで足柄の山中に飛び大松（袈裟掛けの松）の枝に掛ける奇瑞を現じた。その啓示によってこの山中に大寺を建立、大雄山最乗寺と号した。應永元年（一三九四年）三月十日のことである。

道了大薩埵について

大雄山最乗寺の守護道了大薩埵は、修験道の満位の行者相模房道了尊者として世に知られる。尊者はさきに聖護院門跡覚増法親王につかえ幾多の霊験を現され、大和の金峰山、奈良大峰山、熊野三山に修行。三井寺園城寺勧学の座にあった時、大雄山開創に当り空を飛んで、了庵禅師のもとに参じ、土木の業に従事、約一年にしてこの大事業を完遂した。その力量は一人にして五百人に及び霊験は極めて多い。

應永十八年三月二十七日、了庵禅師七十五才にしてご遷化。道了大薩埵は「以後山中にあって大雄山を護り多くの人々を利済する」と五大誓願文を唱えて姿を変え、火焔を背負い右手に拄杖左手に綱を持ち白弧の背に立って、天地鳴動して山中に身をかくされた。以後諸願成就の道了大薩摩埵と称され絶大な尊崇をあつめ、十一面観音菩薩の御化身であるとの御信仰をいよいよ深くしている。

●昭和35～37年 信如台新築工事

●昭和30年代 大雄山最乗寺光明亭

●昭和41年 奥之院再建工事

●昭和53年 大雄山最乗寺参道石垣工事

●昭和34・35年 大雄山最上寺開山堂